

自前主義のDNAが高い評価のドキュメンタリー番組を生み、ローカル局として独自性を発揮し続ける

山口放送株式会社



赤尾 嘉文 会長
(あかお・よしふみ)

●会社概要

所在地：周南市大字徳山5853-2
 事業内容：テレビ放送、ラジオ放送
 開局：昭和31年4月
 代表者：代表取締役会長 赤尾嘉文
 代表取締役社長 岩田幸雄
 資本金：23,000万円
 支社・支局：東京支社、大阪支社、広島支社、
 山口支社、下関支社、福岡支社、
 岩国支局、宇部支局、萩支局

●会社沿革

昭和31年 3月 (株) ラジオ山口設立
 4月 ラジオ放送開始
 昭和34年10月 テレビ放送開始
 昭和36年 6月 現商号に社名変更
 昭和61年 9月 本館完成
 平成17年 1月 デジタル放送センター増築
 平成18年10月 地上デジタル放送開始



▲ 山口放送本社外観

はじめに

KRY山口放送は、日本テレビ（NTV）をキー局とするNNN系列のローカル局だ。ラジオ放送の開始が昭和31年、テレビ放送の開始が昭和34年と、山口県の民放局としてはもっとも“老舗”である。

このたび、同社制作のドキュメンタリーテレビ番組が日本民間放送連盟の日本放送文化大賞テレビ部門グランプリを受賞した。平成19年6月からの1年間に全国の民放局が制作したテレビ番組の中で、いわば日本一の作品と評価されたのだ。

同社の制作番組に対する評価の高さはつとに有名だ。日本民間放送連盟賞は34年間連続受賞中であり、最優秀賞にも過去17度輝いている。またジャンルとしては、(今回のグランプリ作品もそうだが)ドキュメンタリーに強いことが広く知られている。

全国に数ある放送局の中で、なぜ山口放送は賞を取り続けられるのか。全国に誇れる作品、特にドキュメンタリー作品が作れるには、その背景に高い理念やスキルが存在するはずである。今回の企業紹介レポートはこの点に焦点を絞り、山口放送の強さの背景を探った。

努力と創意工夫による自前主義DNA

同社では創業まもなく、こんなことがあった。昭和30年代後半、テレビ放送業界がまさに伸び盛りの時期、山口放送は敢えて、経営基盤のさらなる強化を目指して新技術導入や能率増進などを目的とする前向きな合理化施策を積極的に実施していった。このときの合理化成果が今日の山口放送の堅実な基盤の元となっているわけだが、その過程で社員は大幅に減少した。昭和

37年当時220名だった社員数は、10年後には150名になった（現在は約120人）。

合理化の流れは当然制作現場にも及び、少ない人数で番組制作をこなすための工夫をこらさざるを得なくなった。新技術・機器の導入に際して自ら試行錯誤しつつ我が物としていき、撮影のセッティングなども自らの手づくりで工夫しつつこなしていった。このとき以来、努力と創意工夫を背景にした自前主義のようなものが山口放送のひとつの伝統となっていった。「そういうことがうちの社ではDNAみたいに、社員の空気の中にずっと染み込んでいるのです」と同社の赤尾嘉文会長は言う。

このDNAと化した自前主義の伝統は、今日の山口放送社員に途中入社者がほとんどいないことにも表れている。アナウンサーも含めて、みな新卒採用者だ。しかも、地元周南市をはじめ山口県出身者が多い。後述する今回のグランプリ受賞作品を手掛けたディレクターにしても、大学の経営学部を卒業し、故郷にUターンすべくたまたま地元のテレビ局に入社した人物だ。経験やスキルを持って入社したのではなく、社内で白紙の状態から経験を積み、スキルを磨いていき、日本一高い評価を得たドキュメンタリー番組を作り上げたのだ。そして同社の経営陣もまた、同社のいわゆる“たたき上げ”で構成されている。つまり、社員にしる経営陣にしる、人的にも自前主義なのだ。

ドキュメンタリー制作へのこだわり

山口放送の創業時の社長・野村幸祐氏(故人)は、山口県教育長だった人物だ。その野村氏の影響からか、同社の報道姿勢には伝統的に、前向きな人の生き方を大切に見つめる気風がある。この気風と、前述の自前主義が絡み合うと、

報道において自らの手で、ある「人」の現場をこつこつ記録することに対する意識の高さに繋がってくる。そして、それら取材内容が蓄積されていく中で、これを再構成して人の生き方をじっくりと見つめたドキュメンタリー作品にしていく意欲の強さにも繋がっていく。

今を去ること40年以上前の昭和40年、李ライン問題が解決、日韓漁業協定が成立した直後、同社の記者2人がその海域に出る漁船に乗り込み、10日間にわたって漁業者の生の声を取材した（ちなみに、この記者2名のうち一人は、現社長の岩田幸雄氏であった）。この取材内容は時節柄全国ニュースで放送され、後に同社初の報道ドキュメンタリーとしてまとめられた。また昭和45年の岩国市沖における戦艦陸奥引き上げ作業時には様々な角度からの取材内容を複数のドキュメンタリー番組にしていったが、この時のドキュメンタリーから本格的に番組として全国放送されるようになっていった。

同社は様々なドキュメンタリーを作り続けているが、ドキュメンタリーに至る当初の目的は報道ニュースであり、それを担当した記者が取材対象を丹念に追いかけていった結果としてドキュメンタリー作品が生み出されていく。丹念に追いかけていくに際し、対象によっては、膨大な年月をかけてこつこつと事の推移を追いかけていくこともある。後述する今回のグランプリ受賞作品が年月をかけた好例であり、また3年前から毎年正月に放送されている「平安の彩」（宇部出身の画家馬場良治氏による、平等院や大原三千院など京都の国宝級建造物に描かれた絵画の復元の様子を追いかけたもの。番組提供は山口銀行）なども、「この修復作業が続く限り」という非常に長いスパンで取り組んでいるものだ。

現場のこういう取り組み姿勢を可能にしてい

る背景に、同社トップ層の、目先の損得だけにこだわらない番組作りに対する思いがある。日々の報道番組にしても、たとえ目先赤字でも、県民に有益な番組であれば、打ち切りにせず続ける（早朝放送される「KRYさわやかモーニング」や夕方の「熱血テレビ」は、このようにして生き残り、今日看板番組のひとつとなっている）。そういう思いがあるから、取材対象を延々と追いかけていくことについても、意義あることであれば止めない。赤尾会長は言う。「番組を作ることにについて、僕は口を出した記憶がない。こういうものを作りたいとディレクターが企画書を上げてきたら、これが本物で、意味あることであれば、資金的にまあまあゆるせる範囲であれば黙ってやらせている。いつどのタイミングで何回撮っておこうというのはディレクター自身が決めることで、3年でも5年でも、その者が納得するまでさせている。僕だけでなく、社長以下みな同じ思いだ。このへんはちょっと、今時の間尺には合わないかもしれないが、それは、地方局としてのひとつの個性だと思っている」

これに対して、上記「平安の彩」の担当ディレクターは言う。「本当に、自由にやらせていただいている。今回の企画も、既に100回以上は取材に行っているが、一度も行くなと言われたことがない。しかも、番組を作ることに關しては、経営陣からも同じ目線でみていただけるので、こちらからいろいろな意見も言わせてもらえる。制作者というのは安心できる土壌がないともものは作れないと思う。また会長はよく、番組制作というのは局の命であり、ドキュメンタリーは良心だとおっしゃる。僕はこの言葉を重く受け止めていますし、制作者としてはすごく嬉しいことです」

日本放送文化大賞グランプリを受賞

日本民間放送連盟（民放連）が昭和28年に創設した日本民間放送連盟賞については、「はじめに」でも述べたように、山口放送は受賞社の常連となっている。特に昭和50年以降は、一度も受賞を逃したことがない。そして最優秀賞にも過去17度輝いている。

一方、日本放送文化大賞は、民放連が平成17年に制定した賞で、「視聴者・聴取者の期待に応え、放送文化の向上に寄与した」番組に選定される。今回、同社制作のドキュメンタリー番組『山で最期を迎えたい ある夫婦の桃源郷』が、同賞のテレビ部門グランプリを受賞した。グランプリを獲得したのだから、平成19年6月からの1年間において、放送文化向上の視点に照らした場合、日本一のテレビ番組と評価されたわけである（ちなみに、準グランプリは東京放送（TBS）が制作した番組だった）。この賞が創設されてまだ4年目であり、グランプリの榮譽に輝いたのは、中国・四国・九州の民放局の中で初めてという快挙だった。

なお、同番組のテーマは、老後になって「山で最期を迎えたい」と、終戦後開拓した山に再び戻って行った老夫婦の生活を追い続けることによって、人の生き方、夫婦愛、家族愛などを問い直したものである。あしかけ18年（!）に亘ってこの老夫婦を撮り続け、担当ディレクターも二代にまたがっている。



▲ 「山で最期を迎えたい」の一場面

スキルアップ

今回のグランプリ受賞作品もそうだが、同社が過去に制作してきたドキュメンタリー番組は、全国的に非常に高い評価を得ている（下表参照）。そして、前述したように、自前主義の同社の社員は新卒で、白紙で入社してきた人たちが構成されている。同社の中で、どうやって、全国トップクラスの作品を作るスキルを研いでいるのだろうか。

これには、日々のOJT（職場での実務を通じて意図的・継続的に行う訓練）に負うところが大きいようだ。その様子は、以下のようなものである。

そもそも、ドキュメンタリー「番組」が結果として脚光を浴びてはいるが、前述したようにこれらの取材は元々、日々のローカルニュース番組を充実させるための報道取材が出发点となっている。その日々の報道取材の際、取材担当者は先輩方からいろいろ指摘を受け、考えさせられる。たとえばほんの3分程度の報道映像であったとしても、先輩から「あなたは何を感じたのか。どう思い、何を伝えたいのか」と問われる。そして、「どういうふうに考えてこういう質問をしたのか」「この映像はどういう意味で撮ったのか」などいろいろ問われる。そういっ

た中で、最終的には、その地域に生きている人たちが、どういうふうに考えてそういう行動をとっているのかちゃんと取材出来、ちゃんと伝えられているのかということがシビアに問われる。担当者は、そのOJTを通じて、対象者に対する思いが深くなっていき、それを率直に伝えるためにはどう報道したらよいか工夫するようになる。そうしてどんどん深くなっていく思いが、おのずとドキュメンタリー番組制作に際しての方向性を定めていく。

同社の自前主義のDNAが、こうした日々のOJTをもたらし、日々の創意工夫をもたしている。先輩格の社員が言う。「要は日常です。僕もかつて日々言われてきました。また今や後輩に日々伝える側となったこちらも、それを言うことで自分自身が今ブレていないかどうかを無意識に再確認しているのだと思います」

先輩格の社員は続けて言う。「僕は現場でよく、企画書を書かないとダメだと言う。ディレクターは企画書が書けないとダメ。あとは、山口放送は、企画をつぶすのではなく、企画を活かす会社。企画が出たときに、ダメだよこんな企画は、ということはない。甘さは指摘するが、どこかを拾っていくというか、可能性を見出すように心がけている」「また、ドキュメンタリーを作るに際して、わが社は伝統的に人の生き

ドキュメンタリー系の主な受賞番組（テレビ）

2008年	日本放送文化大賞グランプリ	山で最期を迎えたい ある夫婦の桃源郷
2005年	日本民間放送連盟賞最優秀賞	祖父の国父の国～祖国を訴えた日本人移民～
2005年	民間放送教育協会文部科学大臣賞	つらくても頑張る！ 過疎の島のヘルパーさん
1991年	動物愛護映画コンクール 内閣総理大臣賞	人間になりたかったペリカン～カッタ君と幼稚園児の270日～
1989年	民間放送教育協会文部大臣賞	ピエット君 19歳の春
1986年	日本民間放送連盟賞最優秀賞	チチの国ハハの国～ある韓国人女性の帰国～
1985年	放送文化基金賞本賞	死者たちの遺言～回天に散った学徒兵の軌跡～
1979年	芸術祭大賞	聞こえるよ母さんの声が・・・～原爆の子・百合子～

方を見つめるが、その際絶望的な内容にはせず、そこにある生命力というか、そういうものを伝えるようにしている。だから、見ていて、絶望感だけが残るような、いやな気持ちになるものはやりたくない、というのが伝統的な取り組み姿勢です」

以上のような先輩からの意識付けを通じて、テクニカルなスキルも自ずと研かれていく。見よう見まねからでも自助努力して自らを磨いていくのは、前述したように同社の伝統的な取り組み姿勢である。一方で、たくさんの良質なドキュメンタリー作品を見て学び、系列の「NNNドキュメント」への参加などの武者修行でも技が磨かれている。

おわりに

ローカルテレビ局業界はいま、大きな環境変化に直面しようとしている。

民放テレビ業界は基本的に、キー局（東京など）、あるいは準キー局（大阪など）が日々の全国番組を作るが、その番組を全国に放送するについて、キー局・準キー局のお膝元以外は各地のローカル局が分担して放送を受け持つ、という構図になっている。衛星放送のように、このような構図にとらわれず全国一斉放送してし

まうテレビ放送も現れたが、いわゆる地上波と呼ばれる従来からのテレビ放送はずっとこれでやってきた。

ところが、ここにきてテレビ受像機がネット機器化する可能性が生まれ（単に一方的に送られてくる番組を受信するためだけの機械ではなくなる）、また日々の地上波番組もネット配信のような形でも（好きなときに）視聴できる可能性が広がり始めている。このことはローカル局にとって、主要収入源である広告収入にも少なからぬ影響を及ぼしてくるかもしれないし、長期的に展望したときには、ローカル局そのものの存在意義を問い直さねばならないことになってくるかもしれない。

山口放送初代社長の野村幸祐氏は、よく社員に「日本一の放送局をつくろうじゃないか」と言っていたそうだ。その言葉の意味を斟酌して2代社長で現会長の赤尾嘉文氏は「独自性を持って。個性を持って」と言う。そして、「自社で作る番組は、県民の皆さんに対して放送の良心としてこういう気持ちでやっていますよということを示すものであり、山口県のローカル局としての個性、独自性として大切にしている」と言う。たしかに、環境が激変しそうなこれからのローカルテレビ局に必要なのは、個性であり、独自性だろう。その点、日本民間放送連盟賞の受賞の常連であり、またこのたび日本放送文化大賞グランプリを受賞したということは、同社の個性・独自性が（自己満足でなく）対外的にもいかに発揮され続けていることの証左となるものだろう。

（宗近 孝憲）



▲ 山口放送が獲得した数々の受賞トロフィー